

子どもが運動と出会い直す体育の授業

—「外から観て、内を感じる」を視点に—

穂刈 真由子 教職基盤形成コース 教育課題探究プログラム

キーワード：動感（動く感じ）、教師の共感的かかわり、自らの運動

1. 研究の背景と目的

学校体育では、方法は様々ではあるが、技術の獲得や技能の向上を第一義の目的として、授業実践されることが多い。このことは筆者のこれまでの授業観にも当てはまる。教職大学院での授業参観で、子どもと教師が笑顔で運動を楽しむ姿を目の当たりにした筆者は、これまで経験したことのない心地よさを感じて、自らの授業観に立ち止まった。このときの授業者の小山（2018）は、子ども自ら願いをもって、運動に親しみ活動していく体育の実現において、教師の“できる”という見た目の事実だけではなく、子どもと運動との関係が深まっているか」という視点の重要性を述べている。このような子どもと運動との関係の捉えから、子どもが自ら運動に親しみ、運動したくなる身体が育つ授業の実現に向けて、研究のテーマを「子どもが運動と出会い直す体育の授業」として、研究を進めていきたいと考える。

他者と運動しているとき、頭より身体が先行して思いがけず技ができることがある。このような経験には、自ら運動したくなる身体が育つ上で、動きの変化の面白さを実感することによって運動の楽しさを感じていくことの重要性が含まれると考える。この「思いがけずできた」経験の因果関係を実証することは難しいが、現象として現れた運動をするこの子の内の動く感じ（以下、動感と記す）がどのように変容しているのかを捉えることで明らかになると考える。そこで、テーマ実現に向けて、結城（2017）がコーチングの立場から述べている「外から観て、内を感じる」ことを視点に、外から観た子どもの運動と動感に着目して、授業参観と授業実践における子どもの姿と教師のかかわりから探っていきたいと考える。

2. 子どもの内に働きかける教師の視点【小4フロアボール参観 M児】

小4フロアボールで劇的に動きが変容したM児の姿（図1）の背景には、K教諭のM児自身と運動との関係に共感する働きかけがあった。K教諭はフロアボールの魅力が「状況に応じて自分の動きを対応させ三段攻撃すること」と捉えていた。この教材観を前提に図2のようなM児とのかかわりが生まれたと考える。このとき

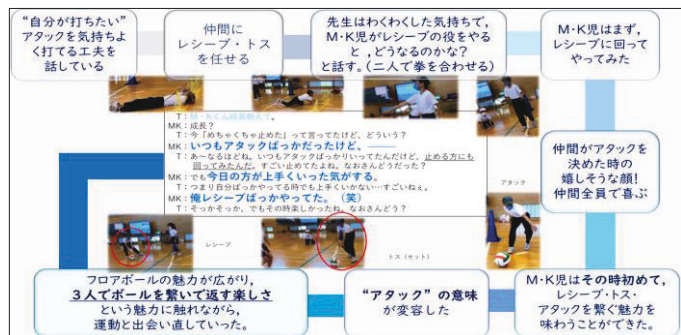


図1 運動と出会い直すプロセス

の状況について、K教諭は「M児と同じチームの他の仲間がどんなアタックができるのだろう、M児が発言していたことが実際にわかって実感的にやってみたら、どんなことが

K教諭：Mくんさ、この前アタックを打つための工夫を話してくれたじゃん。レシーブでボールを吸収するって。
Mくんがレシーブの役割をやったらどうなるのかな？
他のみんなはすぐ気持ちよくアタックできるんじゃない？
 もちろん、どこにボールが来るかなんてわからないから、その状況に合わせて誰かがレシーブして、セットして、アタックを打つかは決めちゃダメなんだけど、ちょっとそこ考えてみてよ。
 M児：わかった。やってみる！（笑顔で言う）
 K教諭とM児：（2人で、拳を合わせる）

図2 K教諭とM児のやりとり

起きるのだろうと、わくわくした気持ちで話した。」と語っている。つまり、このK教諭の働きかけは、子ども個々が安心して楽しく運動に取り組めることを前提に、アタックに対する強い思いを尊重しつつも、M児が他者の動きと自らの運動とが繋がることでアタックが成立する意味の理解を促し、図1のプロセスの自覚化がM児の中で起きたと推測する。このことは、子どもの内にどのように働きかけるかという教師の支援の視点を示している。

3. 子どもが自らの運動と出会い直す場における教師

3.1 運動の特性を捉え、魅力を見出す教師【小4フロアボール参観 M児】

2で述べたM児の変化は、自らも運動する一人として子どもと対等な関係にあるK教諭の在り方が大きく影響していると考えられる（図3）。このことは佐伯（2017）が「相手が見ているモノ・コトを、相手の立場と視点から見て、相手の『ふるまい』が、思わず、自分もそのように『ふるまいそうになる』こと」と述べる、共感的かかわりの重要性とも重なる。この子どもとのかかわり方に



図3 授業中のK教諭の姿

ついて、K教諭は、「本当に全然考えてないよ。ただ、楽しんでほしいし気持ちよさを味わってほしいだけ。」と語る。更に技能の分析が先行しがちな教材研究において、その基盤となるのは「子どもにとってこの運動のどこに魅力があるのか。魅力を味わうために何ができるのかを工夫し考え抜くこと」であるとしている。つまり、K教諭の言葉は、体育の授業における子どもの運動への働きかけは、教師自身がその運動の特性をどう捉え、魅力を見出しているかに大きくかかわることを示している。

3.2 「外から観て、内を感じる」教師【小4シンクロマット実践 I児】

結城（2017）は、選手がパフォーマンスの改善に繋がる可能性を感じられるように、客観的に捉えることのできる現象的な動きと、選手の中だけに内在する主観的なものとしての感覚の両方から、選手の運動に潜り込み考察的に働きかけることを「外から観て、内を感じる」と示している。この視点から子どもとかわろうと考えた筆者は、第4時、技能の向上

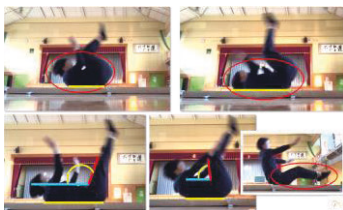


図4 第4時の学習材



図5 授業中のI児の様子

を目的に、どうすれば心地よい回転と立ち上がりを楽しむのかという観点のもと学習材（図4）を考えた。しかし、第4時の授業でのI児の様子（図5）や「今日も合わせて立てな

かった。簡単にできると思ったけど違った。」という振り返りの言葉から、I児が自らやりたい運動なのかを問い直さざるを得なかった。つまり、教師が提示した動きの基準に向かって取り組む活動にさせてしまっていたのではないかということである。このことは、運動の特性を身につけなければ立ち上がりを合わせる楽しさは味わえないという、筆者のこの運動に対する捉えの表れでもある。また、K教諭の「教師が本気になって面白がって楽しむことが大事」という言葉を受け、子どもの内で生まれていたイメージと実際の動感とのずれに目を留めず、動感を、運動方法を身につけるための手段として提供していた自分がいたように思う。「内を感じる」とは、今ある動感に対処するだけでなく、この子が感じている運動への可能性を含み込んだものとして、その動感に共感することの重要性に気づき、改めて、結城（2017）が述べる視点と本研究の目的に立ち返ることとなった。

4. 「外から観て、内を感じる」子ども【小4シンクロマット実践 I児】

4.1 自らの運動として豊かな身体経験への可能性をひらいていく子ども

第5時、教師の動きを基準とした運動ではなく、I児にとって“自分のできそうな感じ”に意識を向けながら自らやりたくなる運動になってほしいと願った。そのために自分・仲間・運動との関係の中で、立ち上がりを合わせることを共通課題として、自分たちの“合わせ”を創り出すように活動を進めた。I児のグループでは、自分たちの動きを実際に見てみたいという願いから、動きの撮影と視聴を通して活動を進めていった。この活動の中でI児を含め子どもたちは、様々に工夫しながら繰り返し自らやりたいマット運動を楽しむ姿があった（図6）（図7）。子どもたちが自らの運動を見て更に技の可能性を探究する姿は、子ども相互に「外から観て、内を感じる」姿として捉えることができる。この活動を通して子どもは、自分の動きを対象化して外から観ることで、内に感じていた動感が表現された動きとして鮮明になり、自覚化が起きたと考える。このことは同時に、自分の感じたことや気づきを他者と共有し、合わせ方を共に追究していった姿と捉えることができ、協働的な運動の探究にも繋がったと捉えられる。また、この外から自らを観ることによる運動との出会い直しは、自らの運動として豊かな身体経験への可能性をひらいていく契機となると考える。第5時のI児の振り返りには、「いつもよりは、なんか軽く感じた。勢いをつけて前転ができたんじゃないかなと思った。」と記されていた。時折笑顔を見せ、仲間と共に前転のあらゆる動きを試し、組み合わせ方を相互に考え合っていた姿から、仲間の動きを感じながら面白そうな“合わせ”を表現し創り出すことの魅力をI児は少なからず感じていたと考える。このI児のマット運動との関係の変容の背景には、「いっせーの一で！」というグループ全員の掛け声で始まる前転が、安心して試みることのできる前提としてあった。これにより、自らの動きが“合わせ技”として子ども相互に共有されていくことへ繋がったと考えられる。



図6 仲間と動きを見るI児



図7 動きを合わせるI児

4.2 動感の共振が生じることで高まる子どもの運動【小4 シンクロマット実践 U児】

開脚前転をできるようになりたいと願うU児は何度か試みるが「できない」とつぶやいた。その言葉を聞いて筆者は、「U児の中でできそうな感じを掴んでほしい」と願い、体を丸めて回ることと、最後の立ち上がる勢いをつけることに意識を向けながら、互いに動きを見合うことやU児との開脚前転のシンクロを試みた。すると、何度か試す中で、突然筆者とU児の立ち上がりのタ



図8 開脚前転をするU児

イミングが合わさった(図8)。この時、筆者との動感の共有が繰り返される過程で、U児の中に生まれた「できそうな感じ」は、動き方の説明や言葉を介して理解されたものではなく、筆者とU児とのあいだで動感の共振が生じたことで、より確信的なものとなり、それが動きの変化につながったのではないかと考えられる。このことは、運動ができるようになっていく過程において、動感の共有とその共振が、自らの運動が高まっていく上での重要な視点であることを示している。

5. おわりに

本研究で、実践を通して明らかになった点は以下の通りである。本来運動とは、主体的で創造的な営みであり、運動と出会い直す経験は、自らの身体の可能性をひらくことにつながる。またこのプロセスにおいては、協働的な場、また教師自身の運動に対する捉えが基盤となる。学校体育では、既定の技を教師から提示して取り組ませることが多い。この提示の先に、如何に子どもが運動の魅力に触れ、自らの運動として感得されていくかが重要である。そのためには子どもの内に生まれた願いをもとに技や技術を子どもが自ら呼び込むこと、そして教師は子どもの運動を現れとして外から観ると同時に内に目を向けて働きかけることが重要である。またこの働きかけは、教師の教材に対する捉えによって支えられている。

この研究の中で、互いの動きを感じ合い、自らが運動の魅力を感じながら、もっとやりたい、できるようになりたいと運動に専心する子どもの姿と出会うことができた。この出会いは、筆者自身の授業観の変容と少なからずかかわっていると考える。そして子どもを、主体的で創造的な運動世界を創り出す可能性ある存在として捉え直せたことが、本研究の筆者自身にとっての成果であると感じている。

文 献

- 小山啓太 (2018). 子どもが「からだ」をひらく体育の授業の在り方 動感となじみを視点に . 信州大学教職大学院教育学研究科高度教職実践専攻 2018 年度実践報告書
- 佐伯胖 (2017). 「子どもがケアする世界」をケアする. ミネルヴァ書房
- 本間二三雄 (1998). 人間学の立場から見た動きの共感の構造. スポーツ運動学研究, 11
- 結城匡啓 (2017). 私の考えるコーチング論 科学的コーチング実践をめざして. コーチング学研究第 30 巻増刊号, 98